

田中剛

繪日記

兵隊996日

鏡書房

繪日記

兵隊996日 田中剛

鏡書房



繪日記

兵隊996日



田中剛

鏡書房

繪日記 兵隊 996日

あ と が き	戦 後	敗 戦	三 年 兵	二 年 兵	初 年 兵	も く じ
.....	
164	151	141	105	81	5	

初年兵



カバー本文イラスト／田中 剛
装丁・レイアウト／田中淑恵

昭和十七年（一九四二年）十二月八日

今日は、日本が米国及び英国に対し宣戦布告し、大東亜戦争に突入した一年目の日である。

この日、本籍地の信州から

「セウシウレイキタ」との電報が届く。

私は年少の頃から胃腸があまり丈夫でなく、食事も人並みに摂ることができず、さらに十九才の時に肋膜炎を患い、翌年徴兵検査をうけたところ、結果は第二乙種、つまり第二補充兵であった。

補充兵とは、戦争が起きて甲種合格の現役兵や、予備役の兵隊が戦場に出て行き、それでもなお兵隊が不足するとき、これを補充するためにあるのであるが、しかしそれは第一補充兵ままで、私のような第二補充兵にまで『お呼び』がかかることはなかった。もっとも第二補充兵などという呼称は最近できたように思う。

中国大陸における長い戦争が一進一退を続け、物資の不足が目立ち、生活にも暗い影が射して来ていたところ、昨年十二月八日の真珠湾攻撃で大戦果が上がり、やはり日本は強いんだ、この戦争はきっと勝つ。と国民は喜んだ。

しかし、戦局は必ずしも日本の勝ち戦ばかりでなく、四月には遂に航空母艦から発進した米軍機が首都東京を空襲するに至った。

生活面では米、味噌、醤油、木炭、砂糖、塩、野菜等々また、衣類その他あらゆる物資が不足して来ていた。そして服装は、男は国民服、女はモンペ姿に変わりつつあった。

若い男はつぎつぎに出征して行き、残るは三十才以上の人や、兵隊に向かない、極端に言えば体に何等かの欠陥のある人という状態になって来ていた。

「パーマネットは止めましょう

革靴止めて下駄履いて

銃後の守りを固めましょう

国民精神総動員

などという替え歌がはやっていた。

信州から郵送されてきた赤紙（召集令状）を見ると、

『第一補充兵に編入する』

とあり、兵種欄には

『高射砲兵』

とゴム印が押してある。

『これでおまえも一人前だ。世間に顔向けができる』

母の口から出た言葉は、まずこの一言だった。若い男はみな出征して行くのに、うちの倅は……と肩身の狭い思いをしていたに違いない。

勿論心の中では、これからの生活（この年の三月に父が死亡して、私の給料で家計を支えていた）や、幼ない弟達のこと、また、ひよわな私の身体のこと——果して兵隊が務まるかどうか——などが交錯していたことと思われる。幸い勤務先で私の給料は全額支給してくれるとこのことで、経済的な面ではひとまず安心できた。

しかし、私のような体軀の者が兵隊になれるだろうか。恐らく即日帰郷となるであろう。また若し兵隊になったとしても、高射砲など射てる筈がない。弾丸運びか雑役でもさせられるのかと思ったりして落着かない。

ともかく、軍隊に入れば、軍人勅諭や戦陣訓などを覚えなくてはならないと教えてくれる人がいて、それではと早速これらを購めて俄勉強を始める。

十二月十四日

出征は明早朝出発なので、今日のうちに、夕食後、家の前の愛宕神社に同じく明朝出征する者二名と共に集合し、近隣の人達が多数参集して見送って下さる中で、武運長久を祈願する。

十二月十五日

いよいよ出征当日。弟が付添って集場所に指定されている埼玉県川口市の厚生道場に向う。厚生道場の建物のあるひろい庭が、応召者と付添人とで一杯になっている。身体検査が始った。

いよいよここで即日帰郷と言われるのかと思って検査を受けた結果、何と「合格！」と言われ、一瞬耳を疑った。同時に、これでおれも肋膜炎が治って兵隊として務まる体になったのだという気持と、これから始まる未知の軍隊生活に対する不安と、戦死するかもしれないという怖れとが交錯した。

「私服を脱いでこの軍服に着替えろ」

と渡された古いダブダブの軍服を着用し、脱いだ服や靴を風呂敷に包み、道場の庭で待っていた弟に渡しに行く。

「随分大きい服だね」

「僕に合うのはこれしかないんだ」

——後日弟から葉書が届いて

〔漫画の兵隊さんのようだった〕

と書いてあった。これを古参兵に読まれて、大分からかわれた。古参兵は現役兵か予備役であ



るから、みな立派な体格をしている。われわれのようなヤセた背の低い兵隊を見るとからかいたくなるのだろう。

長い間の戦争に、体格の良い現役兵は勿論、予備役の者も次々と戦死し、遂に第二補充兵まで召集しなければならなくなったのである。われわれより、ひと足先(九月)に補充兵が入隊しているが、この人達はまだわれわれより体格の良い人が多い。

応召者の身体検査が全部終了、合格者が各

中隊に配属されたのは夕方であった。

私達の一団(約三十名)は髭に白いものが混った老(?)准尉に引率されることになった。

他の者は同じく三十名位ずつ一団となって別の方向へ引率されていた。

「これから省線(JR線)の桜木町まで行くが途中で地方人(民間人)と話をしてはならん」

と、准尉がわれわれ一同に注意する。

桜木町駅で下車して、とっぷりと暮れた夜道を黙々と歩き続ける。向うからバスが来てわれわれの姿を照らし出した。みな、身につかない軍服姿と不安そうな顔つきで歩いている。進むにつれて人家も疎になってくる。田甫道を通り山道にさしかかる。

「何処へ行くのだろう」

「ここは〇〇らしい」

小声でこんな会話をしている者がいる。

大分歩いたなと思ったら、行く手に灯が見えてきた。歩哨が立っているのが見える。目的地へ着いたらしい。

突然、横合いから

「ウワッ！」

というような大きな声がして驚かされる。見ると板囲いのバラックの中に裸電球が一つ灯り、その下に数人の兵隊がギョロツとした眼でこちらを睨んでいる。

——あとで分ったが、これが部隊の正門にある衛兵所で、兵隊が二十四時間交替で勤務し、出入者のチェック、隊内の巡察等をしているのであった。

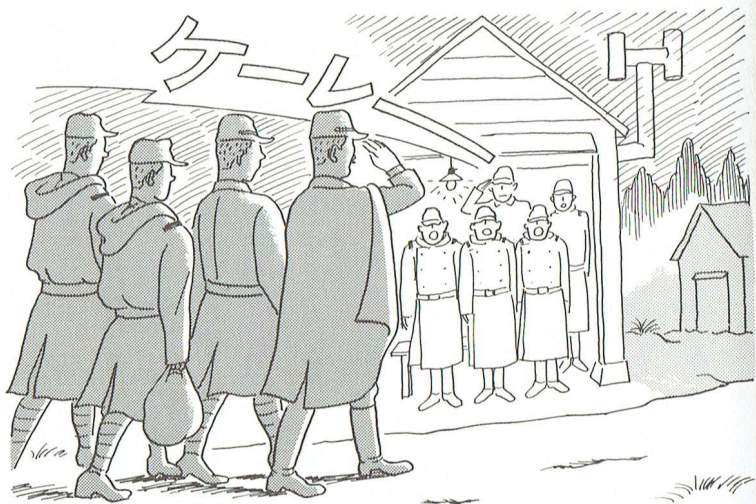
将校が通るときは最初に目撃した者が、「敬礼！」と呼んで、みんなの注意を喚起しなければ

ならないことになっている。そして全員が不動の姿勢をとり、衛兵司令（下士官）が将校に拳手の敬礼をする。

今日は新入兵の受領に岡崎准尉（われわれを引率している）が外出し、そろそろ帰隊する時刻だとわかっている。そこへザックザックとドタ靴の音が聞こえてきたから、衛兵は待ち構えていて全員が一斉に、怒鳴るような大声で「敬礼！」と叫んだわけである。「ウワッ！」は「敬礼！」であった。

衛兵所の少し先にバラック建て平屋の兵舎があり、その前の薄暗い庭に整列していると、中隊長が出てきた。引率者の岡崎准尉が何か報告している。

やがて中隊長から訓示があつて後、われわれは第五内務班と第六内務班に二分され、私



は第六内務班に入ることになった。

眼鏡をかけた、いかつい兵隊の中では上品に見える軍曹が出てきて、

「自分は第六内務班の班長原軍曹である」と自己紹介をした。

内務班に入ると裸電球が一つ灯っており、その下に粗末な白木の食卓があり、われわれのために夕食が用意されていた。飯はベークライトのお椀（昔はアルミ製だったが、物資不足でベークライトにかわった）にいっぱいに盛りつけた麦混りの飯。おかずはイカの煮付け。腹ペコになっていたが、私には量が多く、食べきれなかった。

食事後、班の古参兵の紹介があり

「ここにいる者はみな、おまえたちの目上の者である。目上の者に対しては必ず『殿』をつけるぞ、いいか。例えば鈴木上等兵殿という具合にだ。それからここに九月入隊した駒林二等兵がいる。階級はおまえたちと同じだが、三カ月先輩である。だから名前に殿を付けて駒林殿というんだ。わかったか」

「黙っていないで、わかったらハイわかりました。というんだ。いいか」
別の古参兵がそばから付け加える。われわれ新人兵声を揃えて

「ハイッわかりましたア」

それから「各自の寝る場所を決める」と言われ、藁布団がずらりと並んでいるうちの一つを指定され、毛布をあてがわれた。私物の整理などをしているうちに日夕点呼となる。

食卓の下に木製の長い腰掛けを押し込んで整列して待っていると

「デンコーオ！」（点呼）

と大きな声がして、週番士官が週番下士官を従えてやってくる。班長が

「第六内務班、総員〇〇名、欠員〇〇名、現在〇〇名。欠員の〇名は……異状なし」

と異状の有無を報告する。

点呼後、古参兵から若干の注意があって

「今日はみな疲れているだろうから早くやすめ」

と言われて、床の中へ「窮屈だな」と思いながらもぐりこむ。この寝床は藁布団の上に毛布を一枚敷き、その上に敷布を二枚、更にその上に毛布を三枚重ね、それを藁布団の下に巻き込む。つまり昆布巻の中のカンピョウが藁布団であり、人間が寝る時はカンピョウと毛布の間に敷いた、敷布と敷布の間にはいるわけである。ぎっしり巻いてある毛布を少し緩めないと体がいらないので、慣れないと窮屈に感じる。

早朝から夜まで環境の変化と緊張とで心身共に疲れているのを感じる。国民服から軍服に、外米（輸入米）から麦飯に、綿の布団から藁布団と毛布に変ったこの一日を省みて、これから先は一体どうなるのか。何年経ったら帰れるのか、家の者はどうしているだろう——などと考えて、なかなか寝つかれない。誰も同じ思いであるのか、あちこちで鼻をクンクンさせたり、何かゴソゴソ音がしたりしている。

不寝番がコトリ コトリと足音を忍ばせて巡回してくる……。

十二月十六日

「起床！」

の声に夢破られ「ここは兵営だった……」と思いながら、隣に寝ていた者と顔を見合わせて、「昨夜電車で一緒にここまで来た奴だった」と互いにニヤリとする。

古参兵は慣れたもので、さっさと毛布を畳み軍服を着て、営庭に出て行く。日朝点呼である。われわれも大急ぎで支度をしてあとに続く。日朝点呼は営庭に全員整列して行われる。

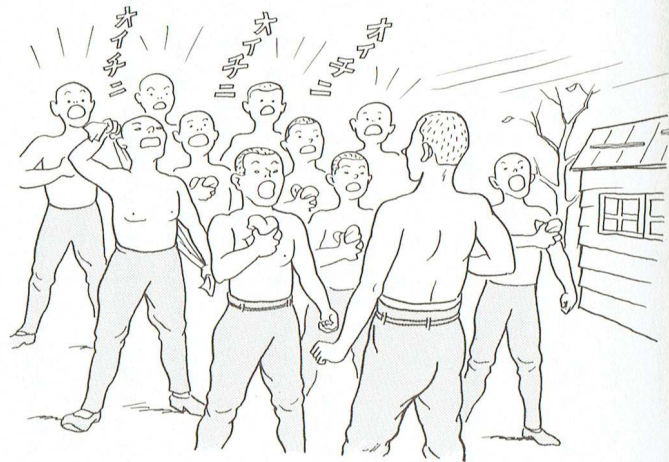
点呼が終ると、古参兵は半裸となって「オイチ、二。オイチ、二」と掛声をかけて乾布摩擦を始める。われわれ初年兵は未だ慣れないからと、上衣の釦を外して、基本体操を一つ一つ教わりながらやる。

基本体操には次の十三種類がある。

- | | |
|--------|-------|
| 脚の運動 | 背の運動 |
| 臂の運動 | 腹の運動 |
| 頭の運動 | 行進運動 |
| 臂脚連合運動 | 側腹の運動 |
| 胸椎の運動 | 跳躍運動 |
| 懸垂運動 | 呼吸運動 |
| 平均運動 | |

であるが、これを覚えるには

脚、臂、頭、臂脚連合、胸椎、懸垂、平均、背、腹、行進、側腹、跳躍、呼吸と一気に言えるようにするんだ。と古参兵から教わる。成程このように並べて言ってみると案外語呂がいいので覚えやすい。



食後、原班長に引率されて陣地内を見学する。高射砲、測高器、高射機関銃その他の兵器

の性能、通信所の器材等について説明があり、陣地から戻って衛兵所、中隊事務室、一班から六班までの各兵室、炊事場、浴場、各倉庫等を見て回る。脂油庫の前で

「ここにはガソリンその他の油が貯蔵されている。地方では油脂というが軍隊では脂油しゆというぞ」

見学途中、週番腕章をつけた佐藤兵長が、原班長に敬礼して通り過ぎる。

「あれは兵長であるが週番兵長とは言わない。週番上等兵というぞ」

この部隊の所在地は鶴見の三ッ池といって、ハイキングコースになっていたそうである。

手紙を出す場合は、この部隊の住所でなく、「川崎市役所気付ムラ」として次に自分の姓名を書くようにと言われる。中隊長が村松中尉であるところから「ムラ」としたのであろう。

○日

初年兵の適性検査があり、その結果私は、丸山、宮坂の両君と共に通信班に、他の者は一分隊から六分隊までの高射砲の砲手とか、観測、監視班等に配属が決った。

○日

銃剣授与式

初年兵銘々に中隊長から銃剣を授与され、

「これは兵器であり、軍人の魂であるから大切に取扱うよう」訓示があった。

数日後、中野君が銃剣を吊す帯革たいがわの遊革あそびがわを陣地内で失くしてしまい

「兵器を失くしたら営倉入りだぞ」

と古参兵におどかさされ、泣べそをかきながら、班長初め全員に協力して貰って探したところ、草むらの中から出てきてほっとした。

○日

われわれ初年兵は、関東、中部、北陸、近畿等各地から召集されてきているので、それぞれのお国訛り、方言がある。

「……それは知りませなんだ」

と、古参兵から質問された森岡君が答えると

「なにイ、知りませなんだとオ、軍隊には知りませんという言葉はないんだ！忘れましと
言え」

「ハイッ、忘れましと」

「いいか、知りませんという言葉は使っちゃならん。それから軍隊へきたら標準語を使え」

この部隊は天皇が富山方面へ行幸された時、護衛として糸魚川に高射砲陣地を敷いたことがあると古参兵が話していたが、富山県出身の初年兵が「ナーモ ダチャカン」などと、お国言葉を丸出しにしても、よく分るらしく、むしろ懐かしげに聞いている。

「自分のことは自分といえ、僕だの私だのと言うんじゃない」

「何々ですではなく、何々でありますといえ」

——この『あります』言葉は長州弁から出たものではないか？ NHKのテレビドラマで、主人公が山口県で育ち、女学生の時に「そうであります」と何度も言っていたのを視聴した——。

「部屋にはいる時は、扉をノックし中から応答があったら、はいります。と言って帽子をとって左脇に挟み扉を開ける。入室したら扉を閉め、帽子を右手に持って真直ぐ下にさげ、上体を十五度に傾けて敬礼する。そして、〇〇二等兵〇〇殿に用事あって参りました。というんだ」

「部屋から出る時は、〇〇二等兵用事終って帰ります。というって十五度の敬礼をして、帽子を左脇に挟み扉を開けて出てくるんだ」

「便所へ行く時は、〇〇二等兵用事へ行って参ります。というって内務班を出るぞ。帰ってきたら、〇〇二等兵用事へ行って参りました。というんだ。洗濯場へ行く時、使役に行く時、炊事へ行く時、どこへ行く時も黙って出て行ってはいかん」

〇日

「戦友」が決められる。私の戦友となったのは、山本、福島、西村の三君。それに予備役の加納上等兵である。

戦友といえは同年兵のみであると思っていたが、古参兵が戦友となり、しかも初年兵は戦友となった古参兵（戦友さんとさんづけにする）の身の回りの世話（洗濯、つくろい物、銃剣や編上靴、宮内靴の手入れ、演習から帰ると、自分より先に戦友さんの銃剣や巻脚絆を取り外し所定の位置に片付ける。etc）をしなければならない。

軍隊小唄の一節に

～早や陽は落ちて月が出て

月の光に照らされて

古兵の履いた泥靴を

磨く我等の哀れさよ

というのがある。

この戦友という方式は、古参兵の戦友さんは初年兵の戦友を教育、庇護し、初年兵はこれに応えて、ごく自然に身の回りの世話をし



てあげる。というところから出たものであろうか（どうかわからないが）

戦友が決して何日か経つと

「おまえら、戦友さんが自分で洗濯をしているぞ！」

「戦友さんの編上靴が汚れているぞ！」

「戦友さんの……」

と他の古参兵に呼びつけられ、いきなりブン殴られる。

初年兵は、演習の合間の僅かな時間に、自分の身の回りのことをするのが精一杯で、また勉強し覚えなければならぬことが山程あるから、廁へ行くにも操典類を持って行って記憶しようとする。こんな状態の中で戦友さんをあてがわれる（とおもいたくなる）のは大変辛くないことなのだ。しかし古参兵はそんなことは自分の経験から百も承知の上である。だから言いわけは一切無用なのだ。言いわけをすると、またブン殴られる。

へアンパン食べる暇もなく

消灯ラッパが鳴り響く

五尺の寝台藁布団

これが我等の夢の床

（消灯ラッパ）

へ新兵さんは可哀そうだよー

また寝て泣くのかよー

○日

私は班長の個室当番を命ぜられた。

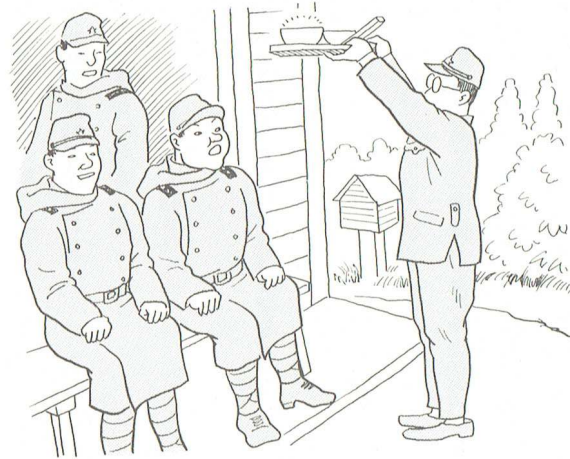
班の古参兵から

「戦友さんのことはしなくてもよいから班長殿の身のまわりのことをしっかりやるように」と言われた。

内務班（兵室）に隣接して班長の個室がある。将校は個室を一人で占有しているが、下士官は一室に二人である。われわれの班長のほかに第五班の班長がいる。従って食事を個室へ運ぶのも、編上靴を磨き、洗濯をし、毛布を畳み、掃除をするのも、他の班の当番兵におくれをとることはできない。

戦友さんもそうであったが、班長も自分からは、とやかく言わない。（人柄にもよるが）他の古参兵からドナられ、殴られるのである。これはつまり、自分の戦友、自分の召使い同様の者には情が移って、ドナったり殴ったりできないからなのであろうか。人間は誰しも楽をした

い、怠けたいという気持があるし、殊に初年兵のうちは緊張の連続でクタクタになるから、ちょっと気を許せば手抜きをしたり、動作が緩慢になったりする。それを他の古参兵が代理で初年兵を追い回すということであろうか。



○日
班長が衛兵勤務（下士官は衛兵司令となる）
にいたので、食事を衛兵所へ運んで行き、
眼の位置より高くささげ（食物を口の高さに
ささげ持つと、唾が飛ぶから必ず眼の高さま
で上げると言われている）思い切り大きな声
を張りあげた。

「第六分隊、田中二等兵、班長殿の食事持
って参りました！」

衛兵所では、初年兵がよく声が小さいとか、
服装、態度が悪いとかで、気合を入られる
（叱られる）ことがあると聞いていたからで

ある。服装の点検は内務班が出る時に十分してある。

「ヨーシ、もっともよろスイ！」

と控衛兵の古参兵（あとで分ったが秋田県出身の菊池一等兵）が東北訛りで激賞した。

原班長もニコニコして

「そうとも、俺の班の兵隊だからな」

と胸を反らす。

入隊して初めて褒められた。この調子でやればいいんだな。と、それからは何処でも大きな
声が自然に出た。

○日

この部隊の在る場所は、小高い山の上で、頂上が陣地、少し下がって兵舎、事務室等があり、
更に下がって炊事場、浴場がある。ここにある井戸では大量の水を汲み上げることができない
ので、ここから更に三十位下がったところに、もう一つ井戸を掘ってある。浴場の水はその
井戸から浴場当番兵が四斗樽に天秤棒で二人がかりで担ぎ上げてくる。霜解けの赤土がツルツ
ル滑って、ただでさえ歩きにくい細い山道である。

水の有難味をしみじみ感じさせるところではあるが……。

浴場の板壁に

『一杯の水も戦友の玉の汗』

と大書して貼ってある。

演習が終ると先ず中隊長以下将校が、次いで下士官が入浴する。

その時、個室当番の兵隊は班長の洗濯済の下着類を持って浴場に駆けつける。脱衣場に班長が脱いである下着と素早く交換して持ち帰り、それを大急ぎで洗濯する。



洗濯したものは所定の物干場物が干ばに干し、日没までには取りこまなければならぬ。うっかり忘れていたりすると、週番上等兵が取りこんで来て呼び出されてブン殴られる。しかし、それはまだいいほうで、盗まれることがある。下着類にも名前が入れているから、古参兵の物は比較的安全であるが、初年兵の物が狙われる。襦以外は官給品（軍隊から支給されたもの）であるから、一定の数しかない。検査があるから枚数不足のままでは済まされない。そこで夕方物干場へ行って自分の洗濯物と似つかわしい程度のもを、あたりを見回しながら失敬して員数を

合わせる。

これは古参兵がそれとなく教えてくれるのである。また、

「ここは一つの中隊しかないから仕方がないが、連隊ではいくつもの中隊があるから、よその中隊へ行って員数をつけて（失敬して）くれれば絶対わからない」

「どうしても員数が見つからないものは、九段へ行けば何でも売っている。下着類は勿論、襟章から銃剣まである」
などとつけ加える。

兵隊の入浴は夕食後から日夕点呼までの間に済ませる。六つの班が週番上等兵の

「入浴呼集」

の合図で順番に入浴する。短い時間に入浴を済ませなければならぬので、浴場は非常に混雑する。

「いつまで、はいつてるんだ。モサモサすんじゃねえ！」
まじまじしていると古参兵から怒声が飛ぶ。

入浴とは名のみで、数分であり、大急ぎで服を着て浴場からとび出す。石鹸を忘れたのに気付く、急いでひき返したが、どこにも見当らない。

「自分の石鹼が無いんです」
などというものなら

「モサモサしてるからだ。このクソ馬鹿野郎！」
と馬鹿の上にくソをつけてどなられる。

私も入隊する時持って来た毛糸の腹巻を浴場に忘れ、あわてて引き返して探したが、影も形もなかった。物資が不足していて、毛糸の製品など、なかなか手に入らぬものだけに残念であった。

「おれらも初年兵の時は入浴なんかオチオチ出来なかった。だからといって入浴しないと叱られるから、入浴しましたと嘘をつく。ところが顔を見れば分るんだ。そんでナ、浴場で顔だけ洗って出てくるんだ。そうすると顔の色艶がよくなって、入浴したようにみえる。よくやったもんだよ」

またもや古参兵が要領を教える。

十二月三十日

この中隊は近く陣地を移動するらしい。という噂があったが、暮も押詰った本日、移動が開始された。

兵器、陣営具、被服等、トラックに積載して運び出す。

私は最後まで残った十数名の兵隊と共に横尾伍長の指揮で、電車で新陣地に行くことになり、駅まで歩く。

桜木町駅前に到着。小休止。自由行動を許された。軍服を着てから半月振りに街に出て、兵隊以外の人々に接する。懐しさというか、束の間の解放感に、同年兵五、六名と共に顔の筋肉を緩め、時計とにらめっこをしながら街を歩く。しかし、土地不案内と時間が少ないのとで、コーヒー一杯飲むこともなく、ひたすら集合時刻に遅れないように気を配りながら歩きまわっただけであった。

桜木町から高田馬場へ出て、西武電車に乗り換え、下井草で下車する。このあたりは鶴見の三ッ池とは違って、少くとも山の中ではない。しかし、小さな町なので、駅から少し行くと家並みが途切れ、畠が道路を取り囲む。

下井草駅から十分位で移動先の陣地に到着。

一夜明ければ、大晦日。

更に一夜明ければ、昭和十八年元旦である。

起床ラッパで起される。

この部隊は防空三六連隊で、通称というか防諜上からか「東部第一九九一部隊」と称し、部隊（連隊）本部は板橋区の前野にあるので「前野本部」と呼称している。

われわれの中隊、第十中隊は第二大隊に所属し、大隊本部は前の道路を挟んで向い合っている。大隊本部は「向井草本部」、十中隊は「向井草中隊」と、所在地名を冠して呼ばれる。他の中隊も同様に、赤羽中隊、江古田中隊などと呼ばれている。さらに中隊長名を冠して呼ばれることもある。

ここへ来てから、郵便物の宛名は「杉並区下井草郵便局気付東部第一九九一部隊」となり、「川崎市役所気付ムラ」より軍隊らしい宛名になった。

この連隊は板橋を中心に北は赤羽から西は杉並下井草まで、東京の西北地区に十一の中隊陣地があり、それぞれ高射砲六門を備え、皇居、軍事施設等を空襲から守るのを任務としている。連隊の上部機関は、東部防空旅団（後に防空師団となる）で、旅団司令部は千代田区九段から少し行ったところの竹橋を渡り、真直ぐ進むと右側にある。

このような任務を持っているので、この部隊は「野戦に準じた」態勢をとっている。従って補充隊のように「寝るも起きるもみなラップ」ではなく、口頭で「起床」「消灯」とドナって伝達する。だが、元旦だけはラップを使用したということであろう。

ラップだけでなく、日曜日の外出も禁止されている。

古参兵が折にふれてうたう軍隊小唄（満期小唄といっている）の中に

へ生まれ故郷をあとにして

逆巻くレールの波越えて

行く先や千葉県富勢村

しかも高射砲二連隊

とか、

へ皆さんご存知富勢村

筑波風が吹きまくる

という唄の文句から察するに、この部隊は、千葉県の高射砲二連隊が母体になっているらしい。

——後日聞いた話によると、この部隊は、近衛高射砲部隊（天皇を衛る部隊）として、全国の高射砲部隊から何名かずつ集めて編成されたものであるらしい。偶々、私に満期小唄を教えてくださいました古参兵が千葉の高射砲連隊の出身であったということで、他の古参兵に聞けばまた少し違った唄の文句であったと思う。

少し横道に外れたが、ともあれ起床ラップでとび起き、前日指示があった重装（といっても外套を巻いて斜に肩に掛けただけの略式であるが）をして営庭に整列。荻窪駅近くの神社に向

って

「駆けあし」

の号令で中隊全員が走り出す。

時刻が早いので未だあたりは真っ暗である。軍靴の響きがあたりの静寂を破る。沿道の家々では元旦草々何事が起きたのかと驚いたりしたことであろう。

神社に到着すると、既に灯がともっていて社殿や杉の木立が闇の中に浮き出ている。

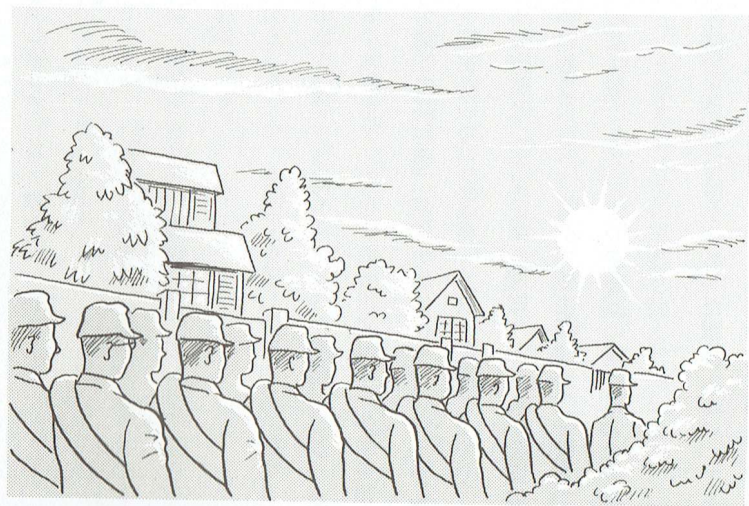
全員社前に整列し、中隊長の号令で参拝。

指揮刀が闇の中にキラリと光る。

初詣を済ませ帰途につく頃には、東の空が白み、やがて初日があたりを照らしだす。その光りを浴びながら軍歌を歌いつつ帰隊する。

～大和魂 弾丸に籠めて

射てよ世界の 夜明けの空に



われらは砲兵 御国の護り

.....

朝食後、新年の式があり、宮庭に机を並べ酒とするめがほんの少々支給されて乾杯。

元旦なので一日休務（休み）となる。入隊以来はじめて休務という言葉聞いて、何か気分が和らいだ感じがしたが、

～七日七日の日曜も

楽しかるべき外出も

憎い古兵の洗濯で

くやし涙で日を送る

と古参兵の唄う満期小唄のとおり、新兵さんは身も心も休まる暇がない。先にも述べたとおりここは「準野戦」であるから、補充隊のように日曜日に外出することはできないし、将校の宮外居住（自宅に住んで軍隊に通ってくる）も勿論認められていない。いかなれば、中隊長以下全員住込みである。

古参兵はこの休務の一日を碁、将棋、読書とか、何処から持って来たのかレコードをかけ流し行歌などを聞いて楽しんだり

など、雑談にふけったりしている。

しかし、われわれは、側へも寄りつけないし、また、そんなゆとりもない。洗濯をしたり、針を持ってつくるいをしたり、それが終ると、軍人勅諭、操典類の勉強など時間がいくらあっても足りないのである。レコードの音が耳にはいつてくるが、何の感興も起らない。——心ここにあらざれば見れども見えず聞けども聞こえずである。

軍人勅諭は入隊前にひと通り眼を通したが、この長文の勅諭を「全部暗記しろ」といわれてびっくりする。

日夕点呼後古参兵から

「軍人勅諭をいってみろ」

と言われ

「我國の軍隊は……」

とやりだす。

間違ったり、つかえたりすると何度でも初めからやり直しさせられる。

軍人に賜りたる勅諭

我國の軍隊は世々天皇の統率し給う所にぞある昔神武天皇躬づから大伴物部の兵どもを率い中国のまつろわぬものどもを討ち平げ給い高御座に即かせられて天下しろしめし給いしより二千五百有余年を経ぬ此間世の様の移り換るに随いて兵制の沿革も亦屢なりき古は天皇躬づから軍隊を率い給う御制にて時ありては皇后皇太子の代らせ給うこともありつれど大凡兵権を臣下に委ね給うことはなかりき中世に至りて文武の制度皆唐国風に倣わせ給い六衛府を置き左右馬寮を建て防人など設けられしかば兵制は整いたれども打統ける昇平に狃れて朝廷の政務も漸文弱に流れければ兵農おのずから二つに分れ古の徴兵はいつとなく壮兵の姿に変わり遂に武士となり兵馬の権は一向に其武士どもの棟梁たる者に歸し世の乱れと共に政治の大権も亦其手に落ち凡そ七百年の間武家の政治とはなりぬ世の様の移り換りて斯なれるは人力もて挽回すべきにあらずとはいいなから且は我国内に限り且は我祖宗の御制に背き奉り浅間しき次第なりき降りて弘化嘉永の頃より徳川の幕府其政衰え、剩外国の事ども起りて其侮りをも受けぬべき勢いに迫りければ朕が皇祖仁孝天皇皇考孝明天皇いたく宸襟を悩し給いしこそ忝くも又惶げれ然るに朕幼くして天津日嗣を受けし初征夷大將軍其政權を返上し大名小名其版籍を奉還し年を経ずして海内一統の世となり古の制度に復しぬ是文武の忠臣良弼ありて朕を輔翼せる功績なり歴史祖宗の専蒼生を憐み給いし御遺澤なりといえども併我臣民の其心に順逆の理を辨え大義の重きを知るが故にこそあれされば此時に於て兵制を更め我國の光を

耀さんと思ひ此十五年が程に陸海軍の制をば今の様に建定めぬ夫兵馬の大権は朕が統ぶる所
なれば其司々をこそ臣下には任すなれ其大綱は朕親之を攬り背て臣下に委ぬべきものにあら
ず子々孫々に至るまで篤く斯旨を伝え天子は文武の大権を掌握するの義を存して再中世以降
の如き失体なからんことを望むなり朕は汝等軍人の大元帥なるぞされば朕は汝等を股肱と頼
み汝等は朕を頭首と仰ぎてぞ其親は特に深かるべき朕が国家を保護して上天の恵に応じ祖宗
の恩に報いまいらする事を得るも得ざるも汝等軍人が其職を盡すと盡さざるとに由るぞかし
我国の稜威振はざることあらば汝等能く朕と其憂を共にせよ我武維揚りて其栄を耀さば朕汝
等と共に其譽を偕にすべし汝等皆其職を守り朕と一心になりて力を国家の保護に盡さば我国
の蒼生は永く太平の福を受け我国の威烈は大に世界の光華ともなりぬべし朕斯も深く汝等軍
人に望むなれば猶訓諭すべきことあれいでや之を左に述べん

一、軍人は忠節を盡すを本分とすべし凡生を我国に稟くるもの誰かは国に報ゆるの心なかる
べき況して軍人たらん者は此心の固からでは物の用に立ち得べしとも思われず軍人にして報
国の心堅固ならざれば如何程技芸に熟し學術に長ずるも猶個人にひとしかるべし其隊伍も整
い節制も正しくとも忠節を存ぜざる軍隊は事に臨みて烏合の衆に同じかるべし抑国家を保護
し国権を維持するは兵力に在れば兵力の消長は是国運の盛衰なることを辨へ世論に惑わず政
治に拘らず只々一途に己の本分の忠節を守り義は山嶽よりも重く死は鴻毛よりも軽しと覚悟

せよ其操を破りて不覺を取り汚名を受くるなかれ

一、軍人は礼儀を正しくすべし凡軍人には上元帥より下一卒に至るまで其間に官職の階級あ
りて統属するのみならず同列同級とても停年に新旧あれば新任の者は旧任のものに服従すべ
きものぞ下級のものには上官の命を承ること実は直ちに朕が命を承る義なりと心得よ己が隸属
する所にあらずとも上級の者は勿論停年の己より旧きものに対しては総べて敬礼を盡すべし
又上級の者は下級のものに向い聊も輕侮驕傲の振舞あるべからず公務の為に威嚴を主とする
時は格別なれども其外は務めて懇に取扱ひ慈愛を専一と心掛け上下一致して王事に勤勞せよ
若軍人たるものにして礼儀を紊り上を敬わず下を恵まずして一致の和諧を失いたらんには啻
に軍隊の蠹毒たるのみかは国家の為にもゆるし難き罪人なるべし

一、軍人は武勇を尚ぶべし夫武勇は我国にては古よりいとも貴べる所なれば我国の臣民たら
んもの武勇なくては叶うまじ況して軍人は戦に臨み敵に当るの職なれば片時も武勇を忘れて
よかるべきかさばあれ武勇には大勇あり小勇ありて同じからず血気にはやり粗暴の振舞など
せんは武勇とは謂い難し軍人たらんもの常に能く義理を辨え能く胆力を練り思慮を殫して事
を謀るべし小敵たりとも侮らず大敵たりとも懼れず己の武職を盡さんこそ誠の大勇にはあれ
されば武勇を尚ぶものは常々人に接るには温和を第一とし諸人の愛敬を得んと心掛けよ由な
き勇を好みて猛威を振いたらば果は世人も忌嫌いて豺狼の如く思ひなんすべきことこそ

一、軍人は信義を重んずべし凡そ信義を守ること^{つね}の道にはあれどわきて軍人は信義なくして一日も隊伍の中に交りてあらんこと難かるべし信とは己が言^{ことば}行^{こと}い義とは己が分を盡すべしなりされば信義を盡さんと思わば始より其事の成し得べきか得べからざるかを審^{つまひら}かに思考すべし臆^{おそ}氣なる事を仮初^{かひ}に諾^{うべ}いてよしなき關係を結び後に至りて信義を立てんとすれば進退谷まりて身の措^おき所に苦しむことあり悔ゆとも其詮なし始に能^{よく}々事の順逆を辨え是非を考え其言は所詮^{そのと}踐^かむべからずと知り其義はとて守るべからずと悟りなば速に止るこそよけれ古より或は小節の信義を立てんとて大綱の順逆を誤り或は公道の理非に踏迷いて私情の信義を守りあたら英雄豪傑どもが禍^{わざわい}に遭い身を滅し屍^{かばね}の上に汚名を後世^{のちのよ}まで遺せること其例^{そのためし}尠^{すくな}からぬものを深く警^{いまし}めてやはあるべき

一、軍人は質素を旨とすべし凡質素を旨とせざれば文弱に流れ軽薄^{はし}に趨^きり驕奢^{きょうしゃ}華麗の風を好み遂には貪^{たを}汚^をに陥りて志も無下に賤^{いやし}くなり節操も武勇も其甲斐なく世人に爪はじきせらるる迄に至りぬべし其身生涯の不幸なりというも中々愚^{おろ}かり此風一たび軍人の間に起りては彼の伝染病の如く蔓延し士風も兵氣も頓に衰えぬべきこと明なり朕深く之を懼れて曩^{さき}に免^{めん}黜^{ちつ}條例を施行し略^は此事を誠め置きつれども猶も其悪習の出んことを憂ひて心安からねば故に又之を訓^{おし}うるぞかし汝等軍人ゆめ此訓^{おし}誠^{まこと}を等^な間^まになし

右の五ヶ條は軍人たらんもの暫^{ゆる}も忽^かにすべからずさて之を行わんには一の誠心こそ大切なれ

抑^{そも}此五ヶ條は我軍人の精神にして一の誠心は又五ヶ條の精神なり心誠ならざれば如何なる嘉言も善行も皆うわべの装飾^{かざり}にて何の用^{いよう}にかは立つべき心だに誠あれば何事も成るものぞかし況^ましてや此五ヶ條は天地の公道人倫の常経なり行い易く守り易し汝等軍人能く朕が訓^{しん}に遵^{したが}いて此道を守り行い国に報ゆるの務を盡さば日本国の蒼生^{そうせい}擧^こりて之を悦^{よろこ}びなん朕一人の懼^{おそ}のみならんや

明治十五年一月四日

御名

——この勅諭の忠節の項に「世論に惑わず政治に拘らず……」とあるのに、何故現役の東条陸軍大將が内閣総理大臣をやっているのだろうか？という疑問が頭をかすめたが、そんなことを尋ねればブン殴られそうなので……

一月〇日

陣地移動後の整理も終り、いよいよ本格的に初年兵教育が開始された。

間稽古と称して、日朝点呼から朝食までの間、陣地裏の原っぱで、敬礼、行進、整列等の教育訓練。霜柱の立ったところへ空っ風が吹く。手がかじけて敬礼の手がピンと伸びない。巻脚

絆はなかなか思う様に巻けない。集合動作が遅れる。

「モサモサするんじゃない。遅れた者は兵舎の回り早駆け！」

走り方が少しでも遅いと

「誰が駆け足をしろといった！早駆けだ、早駆け！」

と怒声が飛んでくる。足に合わないドタ靴を履いて全速力で走らねばならないから、兵舎を一周して戻ると、皆息を弾ませている。最後の方から走ってくる、

「遅い、オッソイ！もう一回早駆け！」

二周もさせられると倒れそうになる。

間稽古を終り、朝食を大急ぎで済ませ、演習が始まるまでの僅かな時間に洗濯や、つくろいものをする。

食事当番になった日は、皆の食べ終わった食器を片付け洗う者、食缶（オヒツの大きなヤツで鍋のツルのような把手がついている）を洗って炊事場へ返納に行く者、と手分けして短時間に終るようにする。

炊事場では炊事係の兵隊が待ち構えていて、食缶の内側、外側、裏を返して底と、くまなく点検する。飯粒が半粒でも食缶の底に残っていたり、細いワラ一筋（縄を丸めてタワシにする

ので）でもへばりついていたりすると、

「何だ、この洗い方は！」

と水の滴っている食缶を頭から被せられる。

「もう一度よく洗って来い！」

「ハイッ」

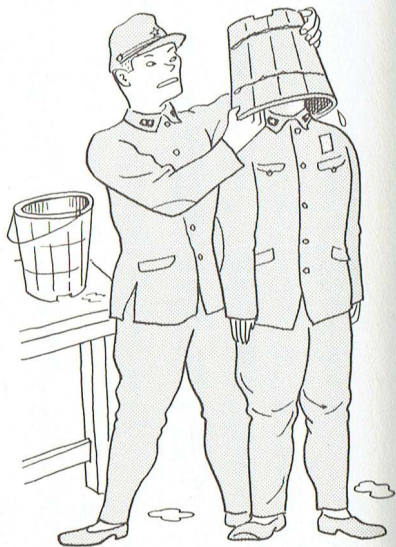
食缶を持って百位離れた洗場へ走る。木製の食缶が古くなっていて、所々腐食して小さな凹みが出来ている。そこに飯粒がひっか

かっている。縄のタワシではいくら洗ってもとれない。木の小枝を探してきてほじり出す。演習呼集の時刻が迫ってくる。まごまごしていると廁へ行っても用も足さずに戻らなくてはならなくなる。

○日

同年兵の井口君が

「おい、古参兵はゆっくり飯を食べているだろう。それでいておれたちより早く食べ終るんだよな。どうしてかと思ったら、あの人達は飯を口に入れたら、ふた口か三口噛んですぐ呑み



込んでいるんだ。だから、ゆっくり箸を動かしているが、食べ終るのがはやいんだ」という。また、

「飯を噛まずに呑み込むと太ってくるんだ。おまえもやってみろ、太るぞ」

太るかどうかは別として、早く食べ終らなくては時間が足りない。私も飯を呑み込むことにした。最初は思うようにいかなかったが、慣れると結構できるもので、そうになると、古参兵より早く食べ終ることができるようになった。

軍隊の『躰教育』では「食事はゆっくり、よく噛んで栄養を逃がさないように食べるんだ」と教える。だが古参兵は

「早飯、早糞軍務のうち。というんだ」

と飯の食べ方の遅い初年兵に向かっていう。このようにタテマエとホンネの違うものに、「私的制裁の禁止」がある。

「教育のためと称して兵隊を殴ってはいかん」

ということを中隊長や週番士官が日朝、日夕点呼の時などに全員に申渡す。われわれ初年兵は「いいことを言ってくれた。やはり軍隊でも上級職の人は違う。これで私的制裁も減るだろう」と心中喜んで聞くのである。

ところが翌日以降も状況は全く変わらないのである。

軍人勅諭の礼儀の項に「下級の者は上官の命を承ること実は直ちに朕が命を承る義なりと心得よ」とあり、上官とは自分より上位の者であるから、初年兵にとっては自分達以外はみな上官である。（厳密に言えば上官とは下士官以上のものと思うが、そんなことは通用しない）

命令に対する絶対服従、学科や術科を覚えさせ、また内務の躰を短時日に会得させるための手段として「私的制裁」は必要欠くべからざるもの。というのであろうが、それならば、「私的」制裁といわなくてもよい筈である。

平手で叩いたり、ゲンコツで殴ったり、ときには上靴（革のスリッパ）あり、棍棒もある。また、殴るだけでなく、数々の工夫をこらし、銃剣を差し上げたままの姿勢を続けさせたり、



鶯の谷渡りと称して、食卓の下を潜っては顔を上げ、ホーホケキョと鳴声を出し、又次の食卓を潜って鳴く。というものなど、いろいろあるそうだが、何れも親や妻子には見せられない無様な恰好を強いられるのである。これを古参兵はニヤニヤしながら眺めている。苦しさ、痛さと屈辱に耐え兼ねて涙を流す者もいる。

「泣くとは何事か」
と又ブン殴られる。

とにかく兵隊は殴られない為に（上官に服従するというよりも）機敏な動作をするようになる。将校や下士官は古参兵が初年兵を殴るのを見て見ぬ振りをしている。というか、タテマエは「私的制裁の禁止」といって、自分達は手を下さず、古参兵に殴らせているようである。それでは将校下士官は絶対に暴力は振わないかというところ、そうでもなく時には将校が下士官を殴ったり、下士官が兵隊を殴ることもあるのである。

日夕点呼後から消灯時刻までの間、内務教育と称して、古参兵が初年兵の教育をする。教育係でない古参兵は新聞を読んだり、碁、将棋などに興じる憩いのひとときである。教育係の古参兵も大変であるが、われわれにとってはこの時間、この人達が鬼のように見える。

われわれ応召の初年兵は私のような若年の者から三十才位の妻子ある者まで年令はいろいろである。石川県出身の向井君はヒゲが濃く、眼から下は鼻を除いて全部ヒゲという感じの三十才になる人物で、郷里には妻も子もいる。その日も日夕点呼後、初年兵教育が始った。誰か一人が何か失策をしても

「初年兵全員たるんどる！」

といわれ、一人ずつ古参兵の前へ出て、有難いビンタの洗礼を受けることになる。

「今日はゲンコツではない。上靴だぞ」

——上靴とは革製のスリッパであるが、物資不足でゴム裏の草履になっている。

古参兵が草履を脱いで一人ずつ殴りはじめる。向井君の殴られる番になった。

妻子のある、人の好きそうなおとつあんが、ゴム裏草履の裏で殴られた。彼の不精ヒゲの回りに白っぽい粉がふわあっと舞い上り、土と埃りがヒゲにまつわりついて灰色になった。一回、二回となぐられているうちに彼の顔が呆けたようになった。殴っている古参兵は二十三、四才である。

○日

タバコ値上げ。このタバコ値上げについて後日、紀元二千六百年の歌の替歌ができたらしい。

へ金鶏上がって十五銭

栄えある光り三十銭

朋翼上がって四十五銭

紀元は二千六百年

○日

私と丸山、宮坂の三名は通信班で教育を受けることになる。

「九二式野戦用電話器」の各部の名称、機能、取扱方法をはじめ、各種通信器材について説明を受ける。

また、通話をする際は「モシモシ」といわず「連絡、連絡」という。

次は延線撤収の訓練。野戦では部隊が進むと同時に通信線も移設しなければならない。その訓練である。目的地に向って速く確実に電話線を架設する作業を延線といい、撤収は、必要のなくなった架線を文字通り撤収する作業である。

絡車に巻付けた黄色い被覆線（電話線）を片手で掲げて走る。被覆線が道路上に一直線に延べられる。それを次の者が立木や電柱、人家の塀などに縛りつけながら進む。通信班のことを「猿まわし」というが、木や電柱に登り、しかも紐（電話線）がついているところから出たものであろう。

目的地に到着すると、被覆線の端末を、担いできた電話器に急いで取付け、基点と交信する。通話が確実に出来れば延線作業は完了する。ここで小休止した後、今度は電話線を撤収しながら

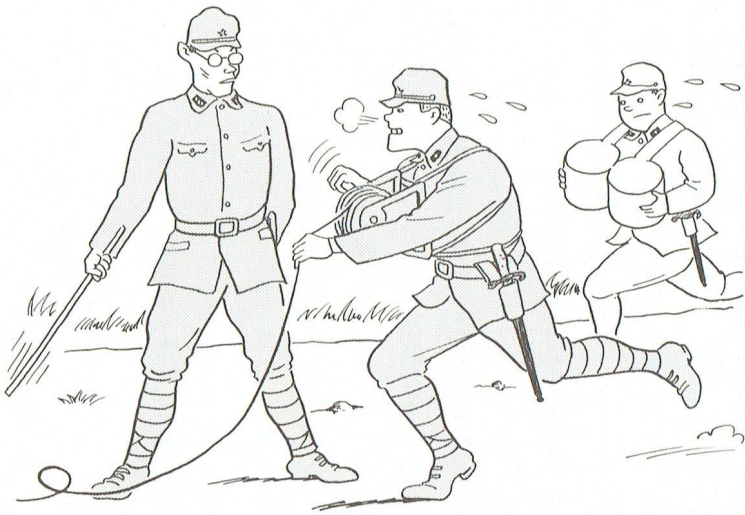
陣地内の基点に戻る。この撤収方法は、一人が結び付けた被覆線を取り外し、又次の結び目へ走って取り外す。その後から絡車（巻線器）を胸部に取付けた一人が転把（ハンドル）を回し被覆線を巻取りながら走る。やがて転把を回す腕が疲れてきて、巻取るスピードが落ちる。絡車に被覆線が巻取られるにつれ、重量が増す。脚も疲れてくる。息を弾ませながら走る。

「そーら、まごまごしていると敵が攻めてくるぞ」

「もっと速く走るんだ！」

古参兵の怒声が飛んでくる。

ハアー、ハアー、息を切らしながら汗を流しヨタヨタと走る。それをニヤニヤしながらムチをビュンビュン振って追い回す古参兵が



うらめしくなる。

「死ぬより辛い通信兵というんだ。こんなことでヘコタレるんじゃない！」
「おっそい(遅い)、おっそい！」

陣地内で絞られる時は回りに兵隊しかいないが、陣地の外へ出て訓練する時は、子供や女性が出てきて眺めている。何ともカッコ悪い。

われわれ初年兵三名の内、丸山君は電気関係の会社に勤務していたので、電気、電話についての知識も経験もあって、比較的悠々とこなしていたが、私は電気の知識も乏しく、三人の中では一番体軀も劣っているので、何彼とまごつき且つへこたれることがあった。

もう一人の宮坂君は身長、体重共、三人の中では一番上であったが、連日の延線撤収訓練がこたえたのか、入隊時既に罹患していたのか、胸膜炎と診断され、練兵休(訓練を休んで兵舎で休養する)となってしまうた。

——二カ月程して訓練許可となったが、このため一期の査閲も受けられず、暫くヤケ気味になつたりしたが、やがて元氣を取り戻し、元通りの明朗な宮坂君に戻った——

有線電話の訓練がひと通り終ると、手旗信号の訓練が始まった。赤と白の小旗を両手に一本ずつ持ち、カナ文字をつくる。それを読みとり、返信も手旗信号で行う。

次に無線電信のモールス符号を覚え、発信器の操作訓練。

イ	レ	イ	(伊藤)	レ	レ	(礼装用)
ロ	ソ	ロ	(路上歩行)	ソ	ソ	(相当降下)
ハ	ツ	ハ	(ハーモニカ)	ツ	ツ	(都合どうか)
ニ	ネ	ニ	(入費増加)	ネ	ネ	(獐猛だろう)
ホ	ナ	ホ	(報告)	ナ	ナ	(習うた)
ヘ	ラ	ヘ	(へ)	ラ	ラ	(ラムネ)
ト	ム	ト	(特等席)	ム	ム	(ムー)
チ	ウ	チ	(地価騰貴)	ウ	ウ	(疑ごう)
リ	キ	リ	(流行地)	キ	キ	(威光発揚)
ヌ	ノ	ヌ	(塗り物)	ノ	ノ	(乃木東郷)
ル	オ	ル	(ルール修正す)	オ	オ	(思う心)
ヲ	ク	ヲ	(和尚焼香)	ク	ク	(苦しそう)
ワ	ヤ	ワ	(ワーと言う)	ヤ	ヤ	(ヤーヤーもう来た)
カ	マ	カ	(下等席)	マ	マ	(マー任そう)
ヨ	ケ	ヨ	(洋行)	ケ	ケ	(経過良好)
タ	フ	タ	(タール)	フ	フ	(封筒貼る)

- コ (高等工業)
- エ (英語ABC)
- テ (手数な方法)
- ア (あー言うところ言う)
- サ (サー行こう行こう)
- キ (聞いて報告)
- ユ (憂国勇壮)
- メ (名月だろ)
- ミ (見せよう見よう)
- シ (周到な注意)
- エ (回向冥福)
- ヒ (飛行操縦法)
- モ (孟子と孔子)
- セ (世評良好だ)
- ス (数十丈下降)

発信器のキーを指先で摺んで信号を打つのであるが、イをトツーだけでなく、伊藤と覚えるという具合に教本に書いてあり、軍隊にしては珍しく、くだけた教本である。

——但し、ネ(寧猛だろ)は(どうもう)の誤読。と辞書にある——

モールス信号と手旗信号は短時日で訓練を切り上げた。内地の部隊には殆ど必要がないからであろう。

○日 執銃訓練

高射砲で戦闘する部隊であるためか、小銃(三八式歩兵銃)は一内務班に数挺しか備えてい

ない。敵は空からやってくるのであるから、小銃の必要性は少ない。ということか。ともあれ、執銃訓練も僅かの日数で終了した。

○日 瓦斯(訓練)週間

今日から一週間、起床から就寝時まで、防毒面携行ということになる。「瓦斯」といわれたら直ちに防毒面を装着しなければならぬ。各将校や下士官は面白がって(?)われわれを見ると

「瓦斯」

「ガス」

と声をかける。その度に大急ぎで略帽(戦闘帽)をパツと後に払いのけて防毒面を装着する。まごまごしていると

「そーら瓦斯で体をやられてしまうぞ」



「そんなにモタモタしていたんじゃ死んでしまうぞ」
などと言われるので、ますます慌てるから、余計時間がかかる。
その慌てる様子がコッケイだと大笑いされたり、浴場や廁まで防毒面を持ち込まなければならぬ煩わしさが一週間続いたが、この一週間は非常に長く感じた。

○日 初めての不寝番勤務

つとめも辛き不寝番

少し居眠りしたなれば

行かねばならない重営倉

不味い麦飯、塩の菜

古参兵が歌う軍隊小唄の一節である。

居眠りするな

絶対に舎外に出てはならない

早起者（勤務で早く起きる者）を確実に起こせ

脱衾者（寝相が悪く、毛布から体をはみ出させている者）や、衛生に注意せよ

いろいろと教育されて、古参兵と二名で不寝番に立つ。消灯後の暗い舎内を懐中電灯で足元を照らしながら巡回する。初めての勤務なので緊張して古参兵の後につづく……。

しばらく巡回していると、うしろに人の気配があるので、ハッとして振り返った時、私の略帽が誰かに搦まれ宙に浮いていた。

「人の入って来たのに気が付かんとはタルんどる。若し俺が敵兵だったらおまえは殺されてるぞ」

衛兵の衛舎掛勤務についていた山梨上等兵が、着剣した銃を肩に太った大きな体で、われわれのうしろに立っている。手には私の略帽を搦んでいる。——彼は野戦下番（野戦帰り）の予備さん（予備役の兵隊）で、初年兵いびりをするというので、われわれ初年兵は

